

「怯えの時代」——自然とのかかわりを考える 人を助けにくる生態系を

私たちはまさに「怯えの時代」を生きることになった。
自然の猛威の前に、そして制御不能な巨大システムの前に。
暮らして働くこと、そして自然とのかかわりを考察しつづけている
哲学者の内山節さんに聞いた。(インタビューは四月十四日)

哲学者

内山 節

●うちやま・たかし 1950年東京生まれ。現在、NPO法人・森づくりフォーラム代表理事など。立教大学大学院教授。近著に『共同体の基礎理論』（農山漁村文化協会）、『清浄なる精神』（信濃毎日新聞社）など。

未来を語ることへのためらい

——雑木林や森と人とのかわりについてお聞きしようと思っていたのですが、そうしたこと今回の大震災と原発事故を抜きにしては考えられません。今回、内山さんは四月二十四日を東日本大震災の追悼の日に呼びかけられました。まずその話から聞かせてください。

日本の社会には古くから、災害や「戦」などのあと

族によって供養された方たちに対しても、みんなで追悼、供養してあげたいと思ったのです。悲劇に巻き込まれた生命への思いを共有し、そのことで一つの区切りをつけ、次の歩みに向かう道筋をつくりだしていきたい。

亡くなった方々を十分に追悼することなく、未来を語ることはためらいを感じます。そこで供養する日を設定、自分がいいと思う方法、できると思う方法で、祈りを捧げようと呼びかけました。四月二十四日は「ちおう」「四十九日」にちなんだのですが、いろいろな宗教の方がいるので「四十九日」という発想は必ずしも適切ではありませんが、呼びかけが浸透していく時間を考えると、二十四日に設定するのがいいかなと思つたのです。こういうことをしないと、僕自身、気持ちの整理がつかないのですよ。

——現時点で、今回の大震災をどのように感じていらっしゃいますか？

震災・原発事故から実際一カ月余りしか経過してないので、正直まだ考えがまとまらないのですが、今回、高齢地域が被災した問題は大きいと思つています。八十歳で生き残つたけれど、伴侶や子供たちを失つて

に亡くなった人々の冥福を祈り、供養をする伝統があります。そのときは人だけではなく、巻き込まれて命を落としたすべての生き物の冥福を祈りました。さらに災害のあと、大地が鎮まることをもみんなで祈つたのです。

大震災で亡くなられた方々に対してはすでにご遺族などの手で精一杯の供養が行なわれたことだろうと思つています。しかしその一方で、ご家族が全員亡くなられ、誰にも送ってもらわなうことが叶わない方々もいる。そのような方々に対してはもちろんのこと、すでにご遺

しまった人たちにとって復興とはいったい何なのかを考えなければならぬ。五十代の人なら、二十年後の復興を目標に頑張ることも可能でしょうけれど、二十年后に百歳になってしまう人にとっては、復興と言われても絵空事になってしまう。

震災の規模を考えれば、簡単に気持ちの整理がつかずもないのだけれど、それでも何とかして整理しないと前へ進むことはできません。はっきりしているのは、他者のために生きられる人は強いということ。頑張る力は、他者のために生きることからしか生まれない。妻でも夫でも、いままで暮らしてきた町の再興のためでも、他者のために頑張れる人は前進することができます。また、そういう人々が集まれば、自然と支援のネットワークも生まれるから、前へ進むことができます。

記憶・伝承が物語るもの

——あらためて自然と日本の社会とのかかわりを、根本から見つめ直さなくてはならない——。そう思うのですが……。